

## Topic

## 雑 感 — 教養部の講義を終えて —

中 島 健 二

- ・最後に、全く関係のない話だが、ワープロで「行くに」とうったら「郁子と」と出たという話をきいて、大笑いしてしまった。
- ・そういえば、時計の電池はもう奥様に入れ替えてもらいましたか？
- ・最後に、この間、先生が話していた、ギョーザの王将に行って来ました。
- ・講義で先生が言っていた、金沢には犬よりも猫が多いというのは本当だろうか。
- ・先生にちっとも似てないらしいハーフのおいっ子さんを一度見てみたいものです。
- ・皇太子の結婚から、農家の長男の嫁探しへと話を切替えたのはとっぴすぎませんか。

……以上は、前期の教養部でわたしが担当した歴史学の試験答案の一部である。教育学部1年の数クラスを主体とした彼ら200人近くを前にして、最初の講義の冒頭で、受験で世界史をとったものはどれほどいるか挙手をさせてみて、愕然とした。2割前後だったと思う。彼らにわずか半年間で「イタリア都市の窓からながめた中世から近代初期にかけての西欧の歴史、とりわけ経済史に重点をおいて」というのをやるのだと思うと、さらに目が回った。考えてみれば、彼らは歴史学をとろうとすれば最初からわたしの講義しか選択できない、そういうカリキュラム編成になっているのだ。

それが〈教養砂漠〉となるかならぬか、それはひとえに教室が教師と学生との真剣勝負の場となるかならぬかにかかっている。わたしは共通一次という、後に「生氣のない、つまらない」学生を輩出したと教授たちを嘆かせることになる制度の元年に受験したものである。しかし、講義には出席するくせに私語

を止めないという、昨今の不可解な現象はまだ見られなかった。講義がすばらしかったというのではない。総じてつまらなかった。だが、そこが砂漠かどうかという判断、砂漠ならどう横断すべきかという選択にポリシーを持たない者は軽蔑視された。わたしは、1年目の夏から講義などほとんど出ず、もっぱら独りであるいは自主ゼミを作り、勉強した。それがわたしの選択であった。

昨今の学生の多くはそこが砂漠かどうかの判断がまずできない。わたしは自分の学生には何としてでも判断と選択を迫りたい。単位にかかわらず、出る価値があると判断した学生だけが講義に出てくればよい。つまらないと判断した学生は何か他の意義あるオアシスを見いだせばよい。それは教師の独善でもなく、責任放棄でもない。「迫る」者と「応える」者との緊張感は、ここからしか生まれない。だが、偉そうなことを言っているが、基礎知識のない多くの学生を前にテーマを絞った講義をしながら、「迫る」ことはなかなか難しい。反省しきりである。それでもわりと学生は多く残ってくれた。居眠りする者もほとんどいなかった。それがどれほど判断と選択の末のことなのか、あるいは逆に猶予のうえのことなのか、未熟なわたしにはまだわからない。もっと「迫る」ためにわたしが勉強しなければ。冒頭は学生の眠気をさますためにあれこれと持ち出した雑談に対する学生たちの反応である。ネタは用意したのが半分、アドリブが半分ほどである。これも勝負のうちだ。

(金沢大学経済学部助教授)